

Be 動詞の過剰生成

伊 東 美 津

0. はじめに

三人称単数現在の *-s* は、英語史から見れば、他の直説法現在の語尾がつぎつぎと衰退する中で、今日まで残っている唯一の直接法現在の語尾である。しかしながら、第二言語習得の研究では、英語学習者にとってその習得は容易ではないことが明らかにされている。¹たとえ、上級の学習者であっても、*-s* の付け忘れといううっかりミスをしがちである。初級の学習者の場合、彼らのエラー文から、人称や時制の処理の仕方に関して、目標言語の大人の文法とはまったく異なった理解をしている習得段階の存在が認められる。²つまり、その習得段階の学習者は、人称と時制の屈折形態素を動詞の語幹 (stem) に付加し、動詞の語幹と一体化させるのではなく、*be* 動詞を人称や時制のためのマーカーとみなし、*be* 動詞を過剰生成しているのである。このような *be* 動詞の使い方は、母語が何であれ初級の学習者に広く見られる現象であり、先行研究でも論じられてきた (Ionin and Wexler (2002), Fleta (2003), 遊佐 (2008))。Be 動詞の過剰生成は、三人称単数現在の *-s* だけでなく、一般動詞の過去形の場合にも観察される。

英語学習者は、さまざまな習得段階で中間文法を形成し、あらたな言語事実が認識されるとその中間文法を修正し、それを繰り返しながら目標言語の文法を習得していくと言われている。それゆえ、初期の習得段階で、学習者が上述のようなエラー文の生成を容認する中間文法を一時的に保有しているというこ

とは十分に考えられる。そこで、本稿では、目標言語の大人の文法ではエラーとなるような *be* 動詞過剰生成文を生み出す中間文法とはどのようなものであるかについて、生成文法での人称や時制の基本的考え方をもとに検討したい。

チョムスキー（1957）を嚆矢とする生成文法は、人が生得的に持っていると考えられている普遍文法の構築を目標としている言語理論であり、第二言語習得のための理論ではない。しかしながら、生成文法での人称や時制の考え方は、第二言語として英語を習得する上で、どこに難しさがあるのかについての理解を深めることを可能にする。また、生成文法の枠組みでは、三人称単数現在 の *-s* の場合と同様のやり方で一般動詞の過去形生成過程で見られる *be* 動詞の過剰生成も説明できるので、意味論や語用論的要因が関与しない統語論的分析の場合、第二言語習得でも生成文法の考え方は応用できることを示したい。さらに、なぜ、学習者が、屈折形態素の代わりに、*be* 動詞を選択するかについても生成文法で提唱された原理をもとに検討したい。

第1章では、*be* 動詞が過剰に生成されたエラー文について観察し、第2章では、本稿の議論に関係する生成文法の枠組みについて簡単に述べる。第3章では、*be* 動詞過剰生成の分析とその要因について検討する

1. *be* 動詞過剰生成の特徴

Be 動詞の過剰生成の問題を議論する前に、文法形態素習得の順序付けについて簡単に触れたい。法助動詞や相助動詞を含まない一般動詞の平叙文では、三人称単数の現在や過去のことを述べる場合、動詞が変化するのは、英語学習の「いろは」の「い」であるが、英語学習者のエラーを観察すると、この習得は容易ではないことがわかる。また、第二言語習得の先行研究でもその習得の困難さは、文法形態素の順序付けの仮説の中で明らかにされている。

第二言語習得における文法形態素の順序付けの仮説というのは、Dulay and Burt (1974) で初めて提案されたものである。³ Dulay and Burt によると、代

名詞の格、冠詞 (*the* と *a*)、進行形と現在分詞の *-ing*、*be* 動詞 (繫辞)、複数の *-s*、*be* 動詞 (助動詞)、規則的過去形の *-ed*、不規則過去形、複数形の *-(e)s*、所有格の *'s*、三人称単数現在の *-s* の順序で習得されるとしている。その後も、文法形態素の習得順序に関する研究がなされ、Krashen (1977) は、それまでの形態素習得順序の研究成果に基づいて、その過程には平均的・一定の順序である自然習得順序 (Natural Order) があることを示した。Krashen の自然習得順序では、習得順序は4段階に分けられている。第1段階では、進行形 *-ing*、複数形、繫辞の *be* 動詞、第2段階では、助動詞の *be* 動詞、冠詞 (*a*、*the*)、第3段階では、不規則過去形、第4段階では、規則的過去形、3人称単数現在 *-s*、所有格 *'s* の4段階の順序で習得されるとし、それぞれの段階内での習得順序は恣意的であるとしている。⁴

このように形態素順序付けの仮説では、三人称単数現在の *-s* や過去といった屈折形態素を、遅い段階に順序付けていることから、その習得が容易でないことがわかる。では、このような習得困難な屈折形態素を、英語学習者は、どのようにして習得していくのだろうか。英語学習者のエラーを観察すると、与えられた入力を、オウムのようにそのまま暗記するのではなく、与えられた入力をもとに何らかの規則性を見出そうと試みていることに気付く。つまり、さまざまな習得過程の段階ごとに学習者なりの一貫性のある規則を適用しているのである。このことは、屈折形態素を習得する過程で、英語学習者はでたらめでアドホックなエラーを繰り返しながら目標表言語の文法に近づいているのではないことを示している。以下の例は、本学の英語学習者のエラーの例である。⁵

(1) a. *I'm play Kendo yesterday.

*I am go to school every day.

*They are consist of father, mother, and sister.

*Some friends of mine are also study it.

- *My mother is cook. .
- *I'm wash dishes.
- *Taro is play the piano.
- *An is not open the door.
- *An is speak Japanese.
- *My sister is treat as if she was my mother.
- *I'm study English.
- *I'm become soccer player.
- *I'm study English.
- *We are call that cat Momo.
- *I'm understand.

b. *Ken is more eat than Lisa.

*Taro is as play as the piano than Hanako.

(1)のエラーに共通するのは、*be* 動詞を用いて、人称や時制を処理しているということである。使用すべきでないところに *be* 動詞を使用しているという問題はあがあるが、*be* 動詞の人称や時制に関しては、正しい形態の選択を行なっている。⁶日本語には、英語の *be* 動詞に相当するものが無いため、母語の転移とは考えられない。また、比較級のエラーの例 (1b) は、一般動詞と形容詞との統語的区別が難しいことを示していると言えるかもしれない。この点については、これを支持する他の証拠との関連で、さらに、第3章で議論する。

Be 動詞の過剰生成は、他言語を母語とする学習者にも見られ、Ionin and Wexler (2002)、Fleta (2003) などでも論じられている。Ionin and Wexler (2002) はロシア語を母語とする子どもの英語学習者のエラーを、Fleta (2003) はスペイン語、フランス語、韓国語、ロシア語、バンツ語を母語とする子どもの英語学習者のエラーをそれぞれ取り上げている。次の例は Ionin and Wexler

(2002: 110-112) が指摘した例である。

- (2) a. *The lion is go down.
 b. *And then the police is come there.
 c. *They are help people when people in trouble.
 d. *He is want go up then.

Ionin and Wexler は、(2c) (2d) から、学習者が進行形を作ろうとして *-ing* を付け忘れたものではないとしている。また、ロシア語では、時制に繫辞の *be* 動詞や、また、いかなる時制でも相助動詞の *be* 動詞はないので、(2) のような *be* 動詞の過剰生成は母語の転移でないとしている。⁷ 結論として、Ionin and Wexler (2001: 112) は、一般動詞の時制や一致を表す屈折語尾の代わりに、*be* 動詞が時制のマーカーとして使用されているとしている。*Be* 動詞の過剰生成は、日本語母語話者ばかりでなく他言語母語話者にも観察され、それは、母語の転移に起因しないことも明らかであるので、*be* 動詞の過剰生成という問題は、一般動詞の屈折形態素習得過程のある段階で現れる言語形態の一つと言える。

本学の英語学習者のエラーには先行研究のデータにはないエラーがある。それは、(3) のように、*be* 動詞の過去形を用いて一般動詞の過去を表すというエラーである。Ionin and Wexler (2002)、Fleta (2003) などの研究では、過去形の場合も、現在形の *be* 動詞を用いるエラーはあるが、過去の屈折形態素の代わりに、*be* 動詞の過去形を用いるエラーはない。他の研究に(3) のような例があまり見られないのは、本学の英語学習者の場合、母語を習得した大人であるのに対して、先行研究のデータは3才から13才までの子どもであるという年齢的な要因などが関与しているのかもしれない。この点は今後の課題であるが、本学学生のエラー文から、*be* 動詞を完全に人称や時制の装置としてみなしているということがわかる。⁸

- (3) *I was go to school yesterday.
*I was study.
*I was read books.
*I was go to the supermarket yesterday.
*He was work in Mexico.
*I was play soccer.
*I was eat lunch.
*I was belong to baseball team.
*She was wash my jacket.
*It was snow on that morning.
*It was a few rain last month.
*I was forget to take out the trash.
*I was wash my coat.

形態素習得順序の仮説からは、遅い段階で習得される一般動詞の屈折形態素の代わりに *be* 動詞を用いることで *be* 動詞の過剰生成が起こるというところまでは言えるだろう。しかしながら、形態素習得順序の仮説のもとでは、*be* 動詞の過剰生成に関して、これ以上理解を深めることはできない。つまり、学習者は、なぜ、一般動詞の屈折形態素の代わりに、他の文法的装置ではなく、*be* 動詞を用いるのかという疑問が依然として残る。この問題を検討するには、言語理論の知見に頼らざるを得ない。以下の議論では、生成文法での人称・時制の考え方に基づいて分析する。

生成文法の枠組みで分析する理由は、そこで提案された規則や原理が、習得のどこに困難があるかを理解する上での手がかりを与えてくれるからである。また、学習者の頭の中で起こっていることについて、樹形図などを用いて視覚的に捉えることで、習得過程で生じる問題点を浮かび上がらせることを可能にするという利点がある。次章では、*be* 動詞の過剰生成の問題を生成文法の枠

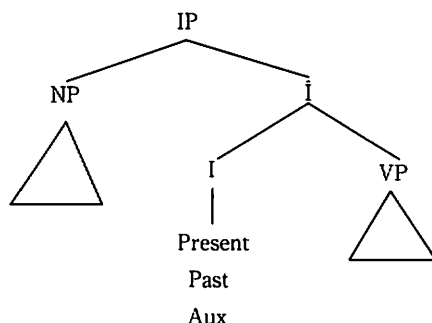
組みで処理する前に、本稿の議論に関係する生成文法での人称や時制の扱い方を概観したい。

2. 生成文法での時制の扱い

チョムスキー(1957)を嚆矢とする生成文法は、子どもは、入力となる言語材料が不完全であるのにもかかわらず完全に母語を獲得することから、子どもは生得的に言語習得を可能にする装置、つまり、普遍文法を備えているとして、生成文法はその普遍文法の構築を目標としている。それゆえ、第二言語習得のために提唱された理論ではない。しかしながら、そこで提唱されてきた時制に対する考え方は、第二言語習得の過程で生じる時制のエラーについても説明を与えてくれる。

学校文法では、*be* 動詞を、人称、時制、数に応じて、変化させたり、3人称単数現在には *-s* を一般動詞に付加したり、一般動詞の過去形は、*-ed* が付加される規則的なものから不規則なものまである。未来形については、助動詞を動詞の原形に先行させる。このように、時制だけでも、形そのものが変化するものから、拘束形態素を付加するもの、自由形態素を動詞に先行させるものなどがあり、日本語のように語末の形態素だけで統一的に扱える言語から見ると英語はかなり複雑である。生成文法では、このような人称、時制、数と動詞との複雑な関係を、文の抽象的レベルにおいて、時制を表す素性とそれらが付加する動詞の語幹を分けることで時制に関して統一的に扱っている。生成文法での時制の考え方は、以下の樹形図のようになる。

(4)



上の樹形図からわかるように、時制の素性とそれが付加される動詞の語幹は別々に扱われている。時制の素性はそれらが付加される動詞の語幹の左側に置かれており、時制の素性が付加されるべき動詞の語幹の右側に隣接して置かれていない。つまり、それは語幹がある VP 内にあるのではなく、 \bar{I} の主要部 I に置かれている。⁹このように最終的出力よりもより抽象的レベルで、時制の素性と動詞の語幹の扱いを別にする理由は、動詞句前置と動詞句削除などの現象をきれいに説明できる点にある。三原 (1997: 107) によると、(5a) では、動詞句の前置が起こっており、(5b) では、動詞句が削除されている。この現象は、(6)の動詞句前置と動詞句削除規則適用前の構造が示すように、動詞句と過去の素性を派生の初期の段階で別々に分けることによって処理できる。

(5) a. John tried to win the race, and [_{VP} win the race] he actually did.

b. A: Did you settle the problem?

B: Yes, I did.

(6) a. A: ..., and he actually Past [_{VP} win the race].

b. B: Yes, I Past [_{VP} settle the problem].

(6)では、動詞句前置と動詞句削除によって、時制の素性 Past が付加される語幹である動詞がなくなる。この場合は、do 支えによって、Past は *did* とし

て表出され、(5a)、(5b) となる。I には現在、過去の時制の素性のほかに法助動詞がある。これらは、二者択一で、両方が同時に選ばれることはない。

次に、生成文法での時制の素性がどのように動詞の語幹と一体化するのか簡単にみておく。繫辞や進行形に現れる *be* 動詞は、VP の主要部の V にある。それは、時制や一致の素性を得るために、*be* 動詞上昇規則適用によって、I に上昇し、そこで時制と一致の素性が付与される。人称および数については、NP の素性をもとに決定される。(7)では、時制の素性が Present であれば *is* となり、Past であれば *was* となる。一方、法助動詞が選択される(8)では、*be* 動詞は I に上昇せず、*be* のままととなる。


(7) $[_{IP}[_{NP} \text{The girl}] [_I [_{\text{Present Past}} \text{Aux}] [_{VP} [_V \text{be}]]] [\text{playing the piano}]]$



(8) $[_{IP}[_{NP} \text{The girl}] [_I [_{\text{Present Past}} \text{Aux}]] [_{VP} [_{Vbe}]]] [\text{beautiful}]]$

一般動詞の場合は、時制や一致の素性は、繰り下がり規則により動詞の右側に付加される。(9)では、三人称単数現在の素性が選択されると、繰り下がり規則の適用で、動詞に *-s* が付加される。過去の素性の場合も、繰り下がり規則適用の結果、過去形が生成される。法助動詞が選択される(10)では、時制・一致の素性の繰り下がりとは起こらない。

(9) $[_{IP}[_{NP} \text{The girl}] [_I [_{\text{Present Past}} \text{Aux}]] [_{VP} [_V \text{play}]]] [\text{the piano}]]$



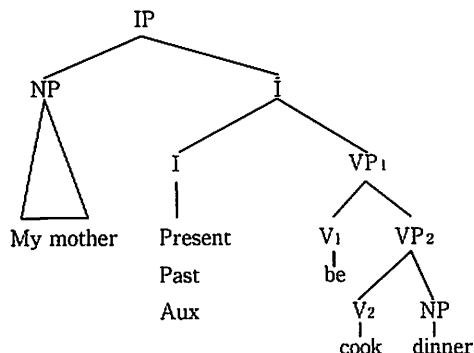
(10) $[_{IP}[_{NP} \text{The girl}] [_I [_{\text{Present Past}} \text{Aux}]] [_{VP} [_V \text{play}]]] [\text{the piano}]]$

3. 分析

本章では、生成文法の枠組みを用いて、*be* 動詞の過剰生成の分析を行う。*Be* 動詞を過剰生成する英語学習者の時制や一致の理解を樹形図で表すと (11a) の文は (11b) のようになる。(12)は目標言語の大人の文法から生成される文とその樹形図である。

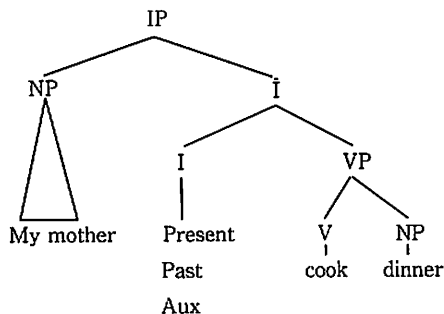
(11) a. *My mother is cook dinner.

b.



(12) a. She cooks dinner.

b.



樹形図(11b)では、 V_1 の位置にある *be* 動詞が、I の位置に上昇し、そこで、*is* として具現化され、その結果、(11a) の文が派生される。この習得段階にある学習者の中間文法は、 V_2 があるにもかかわらず、さらに、 V_1 のある構造を容認可能な文として生成している。このことは、この習得段階の中間文法では、 VP_2 を統語的には形容詞、名詞、前置詞句と同じようにみなしているということを示している。遊左(2008:470)によると、*be* 動詞の過剰生成の問題は英語教育現場では従来から指摘されてきたが、一般動詞と *be* 動詞の区別ができていないという指摘にとどまり、表立って議論されることはなかったということである。しかしながら、生成文法の枠組みを用いると、時制に関して本来(12b)であるべきところを(11b)のように、形容詞、名詞、前置詞句が補語にくる文の樹形図と同じように、*be* 動詞を生成していることがわかる。¹⁰ つまり、従来指摘されてきたように、一般動詞と *be* 動詞の区別ができないのではなく、統語論的には一般動詞を、形容詞、名詞、前置詞句と同じであるとみなしているため、*be* 動詞と一般動詞を同時に句構造に生成するということになるのであろう。その結果、*be* 動詞の過剰生成が起こる。(11b)の樹形図だけでなく、前章で指摘した比較級のエラーからも、一般動詞を形容詞、名詞、前置詞句と統語論的に同定している段階があることがわかる。では、なぜ、初期の習得段階の学習者は、一般動詞を統語論的に形容詞、名詞、前置詞句と同じであるとみなし、*be* 動詞を用いるのであろうか。次に、この問題について検討する。

千葉(1998)は、本稿で議論している *be* 動詞の過剰生成の問題を論じているわけではないが、そこで言及されている生成文法の原理は、その問題へのアプローチを提示してくれる。千葉(1998:369)は、「文法規則を用いた文の生成および理解の過程を大脳内部での認知的演算(あるいは計算)としてとらえた場合、一般的に、認知演算の量の少ない規則(適用)のほうが、コストがすくなくてすみ、それだけ、無標の(unmarked)規則(適用)であるということになる(Borer and Wexler (1987:159))。ある規則の適用に関し、有標とされる適用の仕方と、無標とされる適用の仕方が併存する場合、一般的に後者

の方が選ばれる（これを仮に「有標の原理」と呼んでおこう）。このような選択は、「経済性の原理」Chomsky（1995）の観点からもうなずけるだろう」と述べている。

千葉（1998）で言及された生成文法の有標の原理と経済性の原理は、第二言語習得で見られる *be* 動詞の過剰生成についてもきれいな説明を与えてくれる。目標言語の大人の文法では、*be* 動詞は、人称や時制の素性を得るために、IP の主要部である I に上昇する。そこで、人称・時制に応じて、*is*、*am*、*are*、*was*、*were* のいずれかに具現化される。一方、一般動詞の場合は、*be* 動詞とは逆に、I にある人称や時制の素性には繰り下され規則が適用され、その結果、一般動詞と一体化し、さまざまな形に具現化される。このように、目標言語の大人の文法では、*be* 動詞上昇規則と素性繰り下げ規則の二つの規則が必要となる。しかしながら、初期の習得段階の中間文法のように、*be* 動詞で一般動詞の屈折形態素を処理するのであれば、*be* 動詞の上昇規則だけですむので、コストは少なくなり、*be* 動詞の上昇規則は無標の規則であるということになる。特に、不規則な過去形の場合、屈折形態素の代替としての *be* 動詞の使用のほうが、はるかにコストが少ないということは明々白々である。また、*be* 動詞を使えば、補語の位置にくる形容詞、名詞、前置詞句とまったく同じやり方で、統一的に人称、時制、数进行处理することができ、学習者の立場からするとかなり経済的である。

疑問文や否定文のエラー分析は、*be* 動詞の適用の方がはるかにコストの少ない無標の規則であるという本稿での主張をさらに強める。これまで英語学習者のエラー分析から、疑問文や否定文の習得にもさまざまな発達段階があることが指摘されてきた。¹¹ 本学学生のエラー文からは、特に疑問文や否定文の発達段階のある時期において平叙文と同じように *be* 動詞の過剰生成が観察される。

(13) *Are you wash tooth after dinner?

*Are you brush your teeth after meal?

*Are you like sports?

*Is he know your sister?

*Are they run on the beach?

*Was the train stop at Okayama?

*Were they go shopping?

生成文法では、疑問文の場合、まず、I が文頭に移動する。次に、(13)を生成する中間文法では、文頭に移動した I に、*be* 動詞が上昇する。そこで、人称や時制の素性を与えられ、*am*、*is*、*are*、*was*、*were* のいずれかとなり、*be* 動詞が過剰生成された(13)が派生される。一方、目標言語の大人の文法では、複雑な生成過程となる。平叙文では、I に含まれる素性は、一般動詞と隣接しているので繰り下げ規則により一般動詞と一体化するが、疑問文の場合、文頭に移動した I と一般動詞の間には、主語としての NP が介在するので、一般動詞と隣接しなくなる。その結果、I に含まれる素性には、繰り下げ規則は適用されない。このため、文頭に移動した I の素性は、そのままではいかなる形にも具現化されないため、*do* 支えが適用され、その結果、人称や時制に応じて *do*、*does*、*did* となる。

以上の議論から明らかなように、一般動詞の疑問文であっても、*be* 動詞を用いれば、一般動詞の平叙文での *be* 動詞の過剰生成と同じように、また、補語に形容詞、名詞、前置詞句がきた場合と同じように、*be* 動詞上昇規則という一つの規則の適用だけで処理できるので、はるかにコストは少なくなる。

否定文の場合も同様のやり方で処理できる。

(14) *He isn't walk in the park.

*He is not succeed.

*I'm no drink and smoke.

- *He isn't know your sister.
- *They are not run on the beach.
- *My brother isn't go to school on foot.
- *The train was not stop at Okayama.
- *She wasn't seem shy at first.
- *He wasn't walk in the park.
- *Jim wasn't sleep in bed.

(14)の例では、*be* 動詞上昇規則によって *be* 動詞が I に上昇したあと、I の素性は、*be* 動詞に与えられ、人称や時制に応じて、*am*、*is*、*are*、*was* として具現化される。目標言語の大人に文法の場合は、より複雑になる。つまり、I と一般動詞の間に否定辞 *not* が介在するため、繰り下げ規則は適用されず、I に含まれる素性は、*do* 支えが適用され、人称、時制に応じて、*do*、*does*、*did* となる。従って、*be* 動詞を使用すれば、*be* 動詞の上昇規則だけですむのではるかにコストが少ないことがわかる。また、屈折形態素の代わりに *be* 動詞を用いたほうが、*be* 動詞の文であれ一般動詞の文であれ、平叙文、疑問文、否定文をすべて統一的に扱えるので、この点からもコストは少ない。

以上見てきたように、平叙文、否定文、疑問文を派生する場合、*be* 動詞を用いれば、I に含まれる素性の付与は、*be* 動詞上昇規則だけで統一的に処理でき、かかるコストも少なくなる。それゆえ、学習者が *be* 動詞上昇規則を無標の規則と認識するのは当然と言えよう。結論として、学習者が、*be* 動詞の上昇規則を無標の規則を認識した結果、習得のある段階で *be* 動詞の過剰生成の問題が生じると考えることができる。

Ionin and Wexler (2002: 119) は、屈折形態論の省略は、時制の統語的欠損を示しているのではなく、第二言語学習者は、屈折形態論を動詞の上昇と関連付けており、結果として、第二言語学習者は *-s* や *-ed* を屈折形態素と分析しないと述べている。Ionin and Wexler (2002) も生成文法の枠組みで *be* 動詞の

過剰生成の問題を扱っているが、なぜ、そのようになるかについては明示的に論じていない。では、なぜ、Ionin and Wexler (2002) が主張しているように、学習者は、人称や時制の問題を動詞の上昇、つまり、*be* 動詞の上昇と関連付けるのであろうか。それは、本章で論じたように、学習者の初期の習得段階での *be* 動詞使用の背後にあるのは有標の原理であり、それを経済性の原理が支えているということから説明できる。

Fleta (2003) も、生成文法の枠組みでの分析を行なっている。Fleta (2003) は、スペイン語、フランス語、韓国語、バンツ語を母語とする英語学習者も、動詞の屈折形態素を省略し、*be* 動詞を過剰生成するエラーが観察されるとし、*be* 動詞の挿入は、学習者にとって、屈折形態素のデフォルトとして経済的な解決法であるとしている。Fleta もなぜ経済的であるかについて明示的には述べてはいないが、この点もこの章で論じた有標の理論と経済性の原理で説明できる。

Fleta (2003) は、さらに、体系的な *be* 動詞の使用は UG (普遍文法) の制約を受けると主張しているが、UG の制約とは、どのような規則、原理、パラメーターなのかを言及していない。それは、この章で論じた有標の理論と経済性の原理だとすれば、それらの原理は生成文法では UG の制約一部であるため、UG の制約を受けるといえるかもしれない。¹² しかしながら、認知言語学の立場をとれば、そのような原理は、言語活動だけでなく人の記憶、判断、知覚などの他の認知処理の仕方とのかかわりの中で説明できる。有標の原理や経済性の原理は UG のものか、あるいは、人の認知処理機構と関係しているのかどうかに関しては、今後の検討課題としたい。

4. おわりに

本稿では、英語学習者は、母語が何であれ、屈折形態素の代わりに *be* 動詞によって、人称、時制、数などを表すエラーが広く見られることを示した。ま

た、そのようなエラーが生成される過程を生成文法の枠組みを用いて分析し、なぜ、*be* 動詞が屈折形態素のデフォルトとして選択されるのかの検討を行った。その結果、従来指摘されてきたように、学習者が *be* 動詞と一般動詞の区別ができないために *be* 動詞が過剰生成されるのではなく、一般動詞と補語の位置に現れる形容詞、名詞、前置詞句を統語論的に区別できないことに起因することが句構造分析から明らかになった。さらに、一般動詞と補語の位置に現れる形容詞、名詞、前置詞句を統語論的に同定し、屈折形態素のデフォルトとしての *be* 動詞の過剰生成を引き起こすものは、有標の原理と経済性の原理の働きであることを論じた。第二言語習得段階で現れる体系的とでも言える *be* 動詞の過剰生成が、Fleta (2003) が主張するように生成文法の UG の制約を受けるのか、あるいは、そのような言語活動と他の認知活動とのかかわりを重視する認知言語学的観点から説明できるのかは、今後の課題としたい。

人間の記憶、判断などの他の認知活動から言語活動を自律したものとみなす生成文法は、その対極にあるとも言うべき認知言語学の隆盛に伴い、旗色が悪いように思える。言語活動を人間の他の認知活動から自律したものとみなすべきかについては、今後さらに検証する必要があるとしても、生成文法で提案された規則や原理などは、第二言語習得論においてまったく応用できないというわけではない。本稿において、純粹に統語論的観点からのみ分析を行なう場合、第二言語習得過程で生じる現象を理解するのに有益であるということを示した。

本稿では、生成文法の枠組みで統語論的な問題を扱ったが、第二言語習得で現れる問題となる現象には統語論的なものばかりでなく、意味論的、語用論的考察を必要とするものもある。その場合、一つの言語理論に拘泥するのではなく、現れる現象によって、これまで提案されたさまざまな言語理論の知見を応用することは肝要であると言える。そうすることで、第二言語習得の過程で観察されるさまざまな現象の要因を明らかにでき、それらに説明的妥当性を与えることができるのではないかとと思われる。

注

- 1 第二言語習得の研究では、目標言語が話されている環境での第二言語習得と話されていない環境での外国語教育を区別しない。
- 2 Corder (1967) は、第二言語習得者の誤りのすべてが研究対象とはならないとし、ミステーク (mistake) とエラー (error) という二つ現象を区別する必要性を指摘している。ミステークは、言語運用上のうっかりミスや言い間違いであり、これは、母語話者にも見られる。一方、エラーは、第二言語学習者に見られるもので、エラー分析の対象となるものである。また、上級者に見られるミスは、三人称の主語があるのにもかかわらず、さらに、-s を付けるという余剰性に起因すると言われている。
- 3 Dulay and Burt (1974) の文法形態素習得順序は、スペイン語と中国語を母語とする英語学習者の発話分析の結果に基づいている。
- 4 Shirahata (1988: 93) では、日本語母語話者の場合、*be* 動詞 (繫辞)、進行形の -ing、所有格の 's、*be* 動詞 (助動詞)、複数の -s、不規則過去形、不定冠詞 *the*、三人称単数現在 -s、規則的過去、定冠詞 *a* の順序で習得されるとしている。Shirahata の研究から、Dulay and Burt や Krashen の形態素順序付けと異なり、日本人英語学習者の場合、所有格 -s が、比較的早く習得されていることがわかる。これは、日本語との構造的類似、つまり、「～の」との類似のためと言われている。また、日本人英語学習者にとって、冠詞の習得が遅いのは、英語に相当する冠詞がないことに起因している。形態素習得順序が普遍的であるか否かについては、さらに他言語母語話者の実証的研究を行なうことが必要である。しかしながら、母語の影響により、習得順序に幾分違いはあるとしても、第二言語習得においてある一定の習得順序が存在することは確かである。例えば、三人称単数現在の -s や過去形は、上述した3つの習得順序でも習得が遅いことが示されている。
- 5 本稿での例文は、本学学生の自由作文や短文の英作文から集めたものである。
- 6 エラー文に付けられた*は、目標言語の大人の文法では容認不可能な非文を表す。
- 7 (2)の他の特徴として、*be* 動詞が使われるとき、動詞に屈折語尾が付加されることがないことも指摘している。Ionin and Wexler は "*I'm never opened this one.*" "*He is goes to elementary school.*" のように屈折形態素が用いられたのは2度だけで、過剰生成された *be* 動詞のほとんど大多数は動詞に屈折形態素はついていないと述べている。

- 8 英語学習者におけるこのような *be* 動詞の過剰生成は、日本語を母語とする英語学習者特有の誤りでなく、本学の中国語やベトナム語を母語とする英語学習者のエラーにも見られた。
- 9 I は Inflection の略である。
- 10 本稿での、補語は、学校文法で用いられている意味で用いている。(11b)の VP_2 は、補語が名詞の場合は NP、形容詞の場合は AP、前置詞句の場合は PP となる。
- 11 疑問文の発達順序の研究に関しては Larsen-Freeman and Long (1991) で、否定文の発達順序の研究に関しては Larsen-Freeman and Long (1991)、白畑、若林・村野井 (2010) で詳細に論じられている。
- 12 有標の規則の代わりに、規則的で一般的な無標の規則を適用させる例は第一言語習得でも見られる。例えば、第一言語習得の過程で、*went* でなく *goed* を *feet* でなく *foots* を生成する段階があることは知られている。これは、過剰一般化の例としてしばしば引用されるものであるが、これらの現象も有標性の原理や経済性の原理によって説明できる。生成文法で述べられているように有標性の原理や経済性の原理が第一言語習得過程で発動したものであれば、第二言語習得でも UG の制約の一部が関わる場合もあるといえるかもしれない。

参考文献

- Bore, H and K. Wexler (1987) "The Maturation of Syntax," *Parameter Setting*, ed. By Thomas Roeper and Edwin Williams, 123-172, Dordrecht: D. Reidel Publishing Company.
- 千葉修司 (1999) 「英語の非対格動詞の第一・第二言語習得」『研究報告(3)先端的语言理論の構築とその多角的な検証』357-396, COE、神田外語大学。
- Chomsky, N (1957) *Syntactic Structure*, Mouton, The Hague.
- Chomsky, N (1995) *The Minimalist Program*, Cambridge, The MIT Press, MA.
- Corder, S. P. (1967) "The significance of learners' errors." *IRAL: International Review of Applied Linguistics in Language Teaching*, 5, 161-170.
- Dulay, H. & M. Burt (1974) "Natural sequences in child second language acquisition." *Language Learning* 24: 37-53.
- Ionin, T. & Wexler, K (2002) "Why is 'is' easier than '-s': Acquisition of tense/agreement morphology by child second language learners of English." *Second Language Research*, 18, 95-13.
- Fleta, M. T. (2003) "Is-insertion in L2 Grammars of English: A Step Forward between De-

- velopmental Stagers?" *Proceedings of the 6th GASLA*, 85-92, Caascadila Proceedings Project, Sommerville, MA.
- Krashen, S. (1977) "Some issues relating to the Monitor Model." in H. Brown, C. Yorio, & R. Crymes (Eds), *On TESOL '77*, 144-158 .TEOSOL, Washington, DC
- Larsen-Freeman, D., & Long, M.H. (1991) *An introduction to second language acquisition research*. Longman, London 牧野高吉・萬谷隆一・大場浩正訳 (1995)『第二言語習得への招待』.
- 三原健一 (1999)「統語論 生成文法」『日英語比較対照による英語学概論 増補版』97-136、くろしお出版
- Shirahata, T (1988)"The learning order of English grammatical morphemes by Japanese high school students" *JASET Bulletin* 19: 83-102.
- 白畑友彦・若林茂則・村野井仁 (2010)『詳説 第二言語習得からの検証－理論から研究法まで』研究社.
- 遊左典昭 (2008)「*He is often play tennis* に見られる be 動詞の過剰生成」『言語研究の現在－形式と意味のインターフェイス』470-480, 開拓社.